

グラフィーティ
予備校graffiti

— 私が出会った青春（二） —

目次	ページ
・⑥ Mさんの二つの口癖・・・・・・・・・・・・・・・・	2
・⑦ じゃあ、オレ、家を出るよ・・・・・・・・・・・・	5
・⑧ 様々な「病」、そしてS君のゲップ	
・CさんとNさんの「心の病」・・・・・・・・・・・・	7
・もう一つの「病」	
—「ゲップ・S君」の心の奥にあったもの—	9
・⑨ Y君の海外修行と一年越しの暗記・暗唱・・・・・・・・	12
・⑩ 心優しき東大生・・・・・・・・・・・・・・・・	14
・予備校 graffiti ・⑥～⑩・余録・・・・・・・・・・・・	16
・予備校 graffiti ・もう一つの「青春」②・・・・・・・・	18

予備校 graffiti ⑥

－ Mさんの二つの口癖 －

★Mさんの「特技」は、授業後私への質問を待つ間に、質問者が多くても少なくても、その日のテキスト全文を暗記・暗唱してしまうということでした。数行100語程度どころか、毎回最低その5倍はある英語長文の暗記・暗唱です。これには他の生徒さんたちばかりか私も驚かされ、ある時私の方から質問をしてみました。

「毎回凄いですね。どうやって覚えてしまうんですか？」

「私、馬鹿だから、覚えるしかないですから」

★当時彼女が常に口にしていた言葉、口癖が二つありました。

「私、馬鹿だから」

「私の家、貧乏だから」

謙虚で猛烈な頑張り屋さんだったのです。

★パソコン・メーカー・アップル社の創業者スティーブ・ジョブズが、スタンフォード大学卒業式の式辞で次のような言葉を語っています（2005年）。

“ Stay hungry, (常に飢えてあれ)

Stay foolish. ” (常に愚かであれ)

私もよく授業でこの言葉を紹介するのですが、Mさんは、ジョブズのこの言葉が世に広く知られる前から、既にこの言葉を日常に生きていたのです。

★大学は理科系でした。平日は実験やレポートで忙しかったため、Mさんは日曜日になると、丸一日をアルバイトに充てていました（効率が良い「コンパ系」の飲み屋のバイトです）。それで蓄えたお金で、また寸時を惜しんで培った語学の成果を試すために、春、イギリスやフランスでホーム・ステイをします。私の知る限り、残念なことです。春休みに大学生の大部分がすることとは、旅行やサークルで「青春をエンジョイ」することで、何かまとまった勉強・研究に2か月ほどを費やすことはまずありません。

★「私、貧乏だから」—— Mさんはお金のかかる、また日本人が群れるロンドンやパリなどは避けて、語学の研修先に選ぶのは決まって田舎町でした。アルバイトばかりか、奨学金をとるためにも、彼女は一所懸命に勉強に打ち込み続け、大学院に進むと、その努力はフランスの名門大学への二年間の留学となって実を結びます。フランスだからと言って、ファッションやワインなどへの関心を示すことはなく、日本からやってくる友人などに、大好きなC.C.レモンを差し入れて貰い、それを至上の喜びとして楽しんでいたようです。この種のエピソードは尽きません。たゆまぬ努力で実力を蓄えたMさんは、三十代の半ばで某国立大学に教職を得ることになります。

★理科系とはいえ、Mさんはドストエフスキイ研究会に大学院時代まで出席を続け、ドストエフスキイと聖書とを共に熱心に読み続けました。日本においてはドストエフスキイの愛読者でも、ドストエフスキイ世界の根底をなすのが聖書世界であることを知りながら、それと正面から向き合うことをまずしないのが現実です。しかしMさんは、聖書理解がドストエフスキイ理解に不可欠だと知ると、聖書にも打ち込むことを当然とする、新しい「ドストエフスキイ世代」の先駆けの一人だと言えるでしょう。得意のコンピューターで聖書の様々な情報の計数的処理をし、私の友人で新約聖書学を専門とするS君の授業に出席をさせて貰い、またパレスチナの考古学発掘調査団にも加えて貰うなど、ひとたび関心を持った対象には、そして必要と思うことには、知的好奇心と探求心とをフルに発揮してぶつかってゆく若者なのです。

★大学進学についても、今では自身が大学で教える立場にいますが、実にリアルで厳しい考えを持っています。以前河合塾の「エンリッチ講座」で、Mさんに話をして貰ったことがあります。この時彼女は、大学というものが社会の決めた「階段」であり、皆が行くから、そして親がお金を出してくれるからというだけで入る人が多い。このような目的意識も持たずに大学生になる人たちは、サークル活動とアルバイトやコンパに熱中する能天気な遊び人となり、また就職だけを気にする小さい人間になり、結局は専門の勉強もろくろくしないで四年間を無駄に過ごして終わってしまう。大学に行くのは止めた方がいい。また専ら偏差値を基準として、「有名大学」や「医学部」への進学を指導する高校の先生たちや、それを有り難がる親たちをも厳しく批判したのでした。遠慮のない彼女の話は、河合塾生に強いインパクトを与えました。

「エンリッチ講座」とは、河合塾生を対象とした河合文化教育研究所が関わる教養講座です。ほかにも毎年全国の校舎で数十の講座が持たれ、様々な分野での専門家や先輩に話をして貰っています。「エンリッチ講座」については、「研究会便り（1）（2）」も参照して下さい。

★Mさんの二十代は、大学とドストエフスキイとアルバイトと海外での勉強に、全力投球の十年間でした。このように記すと、Mさんが何か余りにも冷徹で非人間的な女性のように思われる人がいるかも知れません。逆です。彼女は大変な弟思いであり、三十代前半はご両親の様々な病気とも辛抱強く付き合い、遂には愛するお母さんを失ってしまったのですが、海外での学会に出席している時にも、そこから病床のお母さんに常にメールを打ち続ける優しい娘さんでした。

★フェルメールの絵画も大好きで、海外の学会に出かけると、その地にある美術館を時間の許す限り訪れ、そこにフェルメールの作品があれば私に絵ハガキを送ってくれ、複製画をお土産に持って来てくれたこともありました。ドストエフスキイ研究会では、日頃ドストエフスキイとの取り組みと並行して、聖書や様々な絵画や音楽などの芸術作品とも取り組んでもらい、若者に芸術的・哲学的・宗教的認識力を深化させる訓練を課しているのですが、Mさんはこの趣旨も正面から理解し、実践する人でした。

フェルメールについては、多くの人がその最高傑作を「デルフトの光景」としていますが、Mさんも長い間この作品を課題としていました。ある時研究会で、この絵画の中に描かれた幾つかの単純な直線や曲線を指しながら、そこにある「永遠感」を指摘する彼女の自然な語りぶりに、私は彼女の鑑識眼の深まりと、人間としての成長を実感させられたのでした。

★これを記しながら私は、Mさんの原点が「私、馬鹿だから」「私の家、貧乏だから」、これら二つの口癖にあることを改めて実感させられます。また言葉の真の意味で、Mさんが「庶民」であることも。つまり彼女は、我々人間が誰でも本来内に蔵しながら眠らせてしまっている資質、「高きに向かう精神」を開花させようと自発的に本気で努力をする人であり、このことが「庶民」という言葉を私に自然に思い起こさせ、「庶民」であることの本来の意味について考えさせてくれるのです。

★最後に再びスチーブ・ジョブズに戻りましょう。“Stay hungry, Stay foolish.”(常に飢えてあれ、常に愚かであれ) —— 彼はMさんのような若者・庶民が出来るだけ多く育ってくれることを願って、パソコン創りに命を捧げたのではないのでしょうか。

(この項 了)

予備校 graffiti ⑦

— 「じゃあ、オレ、家を出るよ」 —

★K君は小学校から中学校にかけて、お父さんの仕事の関係からメキシコでの生活を送り、ここで辛い体験を味わいました。メキシコの子供たちが彼の前で、目の両端を引っ張り上げてからかうのです。

「チーノ！」 (「中国人！」)

「ハポネーゼ！」 (「日本人！」)

アジア系の私たちは目の両端が切れ長なことが特徴ですが、これをメキシコに限らず欧米の人たちの多くは **unfamiliar, strange** なものと感じ、特に子供たちは、よい意味でも悪い意味でも遠慮や加減というものを知らず、平気でからかいの対象とします。これに対してアジア系の人たちは、最近は整形手術で目鼻立ちを変えようとする人が多いと聞きますが、私には全くの的外れなこととしか思えません。

★K君はこの時、幼な心に、「お互いのことを理解し合わないから、このような差別やからかいが生まれるのだ」と思ったのだそうです。日本に帰って大学受験の時が来ると、彼はこの体験を胸に、まずは徹底的に日本文化を知ることがを志し、そのためには何処の大学で学んだらよいかを調べたと言います。そして河合塾での浪人生活を経て、早稲田大学・第一文学部に入学をしたのでした。

★世界と人間の心の底に潜む差別意識に目を据え、その克服という大きな目的を持って大学入学を果たしたK君にとり、早稲田大学の多くの学生たちの勉強への姿勢は甘く映ったようです。これはショックだったようで、彼は私に訴えました。

「先生、学生の多くが、サークルだとか、合コンだとか、バイトなどにばかり精力を集中させて、ここは僕が思っていたような勉強の場ではありません」

「僕も自分が大学生の頃から、大学というものは何処も遊び人が多いな、半分は遊び人ではないかと思ってきました。ところで君の基準からすると、今の早大・一文で本気で勉強をしている人は何割くらいと思うかな？」

「僕には、ここの九割以上の学生が学生とは思えません！」

この答えは私にも衝撃でした。残念ながらK君にとって、学生ばかりか大学の授業自

体も大部分は、彼のメキシコでの辛い体験への解答となるような質のものではなかったようです。大学に殆ど行かなくなった彼は、家の近くの多摩川の堤防で読書をし、大学院への進学準備を進めます。

★K君が本当に早稲田大学で勉強をしているとの実感を得られたのは、大学院へ進んできたことだったようです。水を得た魚のように大学院修士課程での研究に打ち込んだK君は、難関と言われる博士課程入試にもパスをし、ここで或る有名な詩人の全集の編纂助手にも選ばれ、見事にその職責を果たしました。Mさんと同じく、三十代半ばで某大学の准教授となった彼は、教壇に立ちつつ学生さんたちの生活指導にも打ち込み、夜遅くまで研究を続けた結果は、見事な博士論文となって出版されました。

★K君についてはもう一つ、プライバシーに関わることですが、大学時代にお父さんと猛烈な喧嘩をして、家を飛び出してしまったことを記すことを、これを読む若い人たちのために許して貰いたいと思います。喧嘩の原因は、彼が語ることをお父さんが批判したことでした。

「そんなのは若者の空論であり、親の脛をかじっているから言えることだ！」

皆さんにも覚えがあるでしょう。どこにもよくある親子喧嘩です。ところがこの時、なんとK君は、お父さんにこう言い返したのです。

「じゃあ、オレ、家を出るよ」

それ以降大学院の頃まで、彼は再びお父さんの前に顔を出すことはなかったようです。お父さんもお母さんもさぞ辛かったことでしょう。しかしお二人は、息子さんの本当の成長というものを目撃されたのではないのでしょうか。最近彼は、お母さんの最期を誠心誠意看取ってあげたのです。

★K君は日本の近代詩を専門として、殊にその日本語の韻律、言葉の響きの美しさに焦点を絞っています。メキシコで聴いた、あの「チーノ！」「ハポネーゼ！」という異国語の響きと、それが持つ残酷さを乗り越えて、彼は日本語の美しさの探求を、ただ日本文学の専門研究の領域に留めず、国を超えた魂と魂の響き合いに、また異文化間の真の理解と交流のために如何に生かしてゆくのか？そこに二十代に学んだドストエフスキイを、彼はどう生かすのか？——自分の大学とも親とも、そして何事とも安易に慣れ合うことを拒否してきたK君は、この大きく困難な課題を、持ち前の反骨精神と彼独自の手法とで、きっとやり遂げてくれるに違いありません。（この項 了）

予備校 graffiti ⑧

一様々な「病」、そしてS君のゲップー

・CさんとNさんの「心の病」

★予備校で教えていると、実に様々な「病」と出会います。文字通り「死に至る病」という悲痛な場合もあれば、この後の⑩で紹介するW君の場合のように、人生の夢の変更を迫られる恐ろしい病もあり、また冬には鼻水の垂れ流しと絶え間ない咳とで、浪人生たちを悩ませる鬱陶しい「流行性感冒」^{インフルエンザ}もあります。今回はまず、私の心に残るCさんとNさんの「病」のことを記し、その後でS君に話を進めようと思います。

[これら三人、殊に前二者の「病」については、人間の心の不思議さと奥深さを示す例として挙げさせて頂きますが、決して面白半分の話題としてではありません。それゆえプライバシーには最大の配慮をし、他の若者たちを紹介する場合よりも、その具体的な事実・状況については、意図的に曖昧に記します]

★予備校において、講師としての私が触れることが多く、また胸を痛めるのは、やはり「心の病」です。Cさんの場合、生来の余りもの几帳面さと真面目さとが、浪人生活の緊張感とプレッシャーとによって煮詰まってしまったようです。時々軽い幻視・幻覚症状が現れるようになりました。そしてなんと私までも、Cさんの幻視・幻覚の中に登場する人物の一人となり、時に私は、彼女が勉強をする図書館に押しかけて行って猛勉強を迫る「鬼講師」になったり、時にその図書館で勉強をする彼女の周りを徘徊する「ストーカー」になったりしたようでした。このために私が遭わされた酷い目のことは、今では笑い話でしかありませんが、ここでは省きましょう。

やがてCさんは医師の適切な治療の効果が出て健康を取り戻し、授業にも通常通り出席するようになりました。また大きな模試で好成績を上げたことを機に、受験も順調で全戦全勝、見事志望校への入学を果たしたのでした。その後私はCさんが通っていた河合塾の校舎がある街で、何回も彼女とすれ違ったのですが、大学生になった彼女は、私のことなど全く知らない人間として通り過ぎてゆくのです。決して「知らんふり」をしているのではないこと、彼女の心に最早私が存在していないことは、直観で分かります。私は正直ホッとすると共に、不思議な感覚にも捕らわれたのでした。

私が取り組むドストエフスキイの世界とは、人間の心を舞台として繰り広げられる人格分裂や人格崩壊を正面から扱う、正に「百鬼夜行」「魍魅魍魎」の世界なのですが、それが決して大袈裟な絵空事などではなく、身近な現実そのものであること、人間の心の底知れなさと不思議さをそのまま提示する世界であることを、私は予備校空間の三十余年で、様々な生徒さんたちの例と共に実感させられたのでした。

「病」を介して現れ出る人間の心の奥深い現実。そしてその「病」からの「癒し」の問題。これらのことについては、また別の機会に、別の形で、ドストエフスキイにおける癒しの問題、またドストエフスキイが土台を置く新約世界におけるイエスの癒しの問題として、正面から取り組まねばならないと考えています。

★Cさんとはまた別に、私の胸に残ると言うよりは、胸を今も刺し続ける生徒さんとの出会いの一例として、Nさんの「心の病」についても記しておこうと思います。

Nさんは教室で、何時も最前列の真中に座席を確保する生徒さんでした。しかし顔を上に挙げて、こちら講師の方に目を向けることは決してしません。目をひたすらテキストとノートとに落とし、常にメモを取り続けているのです。

私の授業は、生徒さんたちに様々な質問や問いを投げかけつつ進めるという型なので、Nさんは私が質問をしそうな気配を察するや、サッと頭を更に深く下げ、まるで落下物から身を守ろうとするかのように、完全防御の姿勢を取ってしまいます。しかし私は生来好奇心の強い方で（意地も悪いのでしょう）、このように頑なに自分の「城」に閉じこもってしまう生徒さんのことは無視し切れないのです。或る時、Nさんがふと視線を上げました。すかさず私は、その時自分が語っていたことに対して意見を求めました。決してヘビーな問題ではなかったのですが、再び下を向いてしまったNさんから、暫くの沈黙の後に返ってきたのは、次の一語でした。

「別に」

冷たく胸を刺す一語でした。答えが返ってきたこと自体は嬉しかったのですが。

間もなく職員チューターさんから、Nさんのご両親と出身高校の両者から、授業中にNさんに声をかけることは止めてくれるよう依頼が来ていることを知らされました。Nさんのことを心配して、授業中に声をかける先生が私以外にも何人かおいでで、これに対して彼女がご両親に、止めさせてくれるよう「直訴」をしたらしいのです。私は複雑な思いで、この（間接的な）「直訴」を受け入れました。

二学期が始まり、教室の雰囲気もピリピリとし始め、自然私もNさんのことに気

を配る余裕がなくなってゆきました。秋が進む頃には、緊張と焦燥とで涙を流しながら授業に臨む女生徒さんも出てくるのです。Nさんは授業に出ても、例の姿勢を前よりも一層頑なに続け、ひたすらノートを取る生徒さんであり続けました。

秋の深まりと共に、彼女の姿が教室から消えました。間もなく担当の職員チューターさんから、彼女が入院したことを知らされました。年が明けて、センター試験前後のことです。Nさんが故郷のご両親によって田舎に引き取られたことを知らされました。その後のNさんのことは、学校にも、担当のチューターさんにも知らせがなかったようです。少なくとも私には知らされませんでした。辛い幕切れでした。

Nさんがひたすら下を向き続ける姿勢。それが私には、何故か常に「城」を守る姿のように感じられたのでした。しかし彼女が必死で守ろうとしていたその「城」とは何であったのか？ 何があの「城」を作らせたのか？ 何が彼女にその「城」をあれほどまで必死で守ろうとさせたのか？ 「別に」という壁を越えて、自分は更に何かすべきではなかったのか？ 浪人生活のプレッシャーだと言えば説明のつくことも多いとは言え、説明だけで済む問題なのか？ Nさんは今もなお「病」の内にいるのか？—— これらの問いに対して、私には何ら答えは出せていないのです。

再びドストエフスキイの世界に戻ります。ドストエフスキイという作家は、このような問題を切り口として人間の心の深淵にどこまでも切り込み、遂には主人公たちの存在そのものを時に悪魔的悲劇的没落に追い込み、更にその没落の底から再生・復活への道を探るといって激しくラディカルな探究者であり思索家です。没落と再生。死と復活—— しかしいざ現実となると、これらドストエフスキイ的ドラマを展開させる力など、我々の内には容易に見出せないことを痛感せざるを得ません。CさんやNさんの「病」のリアリティそのもの、そしてまたNさんの他人を寄せ付けないあの「城」の冷たい壁の感覚。これらは、ドストエフスキイを真似ての安易な試みなど決して許しはしないのです。

このような私の認識は「事なかれ主義」でしかないのか？ 高みから見下ろす評論家的視線でしかないのか？ 或いはこれはやはり精神医学の専門家や宗教者のみが専ら扱い得る、また扱うべき問題なのか？ 現代の大病院においては、各専門分野での協力関係が構築されたと言われ、予備校でも専門家によるカウンセリング体制が出来たようですが、「病」自体の深刻さは増しているように思われます。

ドストエフスキイが描くラディカルな存在論的ドラマを前に、また新約において十字架上で磔殺されるまで自らを他者に投げ出したイエスの生を前に、予備校で私が出会った様々な生徒さんたちの「病」の問題は、今の日本と世界に満ち溢れる様々な「病」と重なり、今も私の胸を刺し続けています。

・ もう一つの「病」

— 「ゲップ・S君」の心の奥にあったもの —

★今回最初の⑥で取り上げたMさんは、私への質問を待つ間に、その日学んだ英文の全てを暗記・暗唱してしまう努力の人でした。ここで紹介するS君が、Mさんのように暗記・暗唱に秀でた生徒さんだったとか、思いもしなかった角度から私に鋭い質問を浴びせる生徒さんだったとかいうような、特別な思い出で私の心に座を占めているということはありません。しかしS君は、私が決して忘れられない質問をしたのです。

★S君について、今も私の記憶に残るのは、彼が鼻先に脂汗を滲ませながら、恥ずかしそうに質問を続ける姿であり、その場面です。ある日、既に彼は大方の質問は終えて、最後のところに差し掛かっている時でした。以下に、その時の問答を再現してみます。

「じゃあ、先生、やっぱり復習は必要なんじゃないかな？」

「そう、時間があれば、復習はする方がいいと思いますよ」

「じゃあ、先生、予習はどうでしょう？ これも必要なんじゃないかな？」

「そう、むしろ予習こそ必要ですよ」

「それじゃあ、先生、予習と復習は両方した方がいいですよね？」

「そう、両方共にするのが理想的ですね」

★ここまできて、S君はもう私に聞くことがなくなっていました。しばらく、もじもじしていた彼は、再び口を開きました。

「先生、最近ちょっと僕、ゲップが出過ぎるようなんですが・・・」

この瞬間です。彼の後ろで質問の順番を待っていた生徒さんが叫びました。

「オイ、ゲップのことなら、オマエ、病院に行けよ！」

★毎日多くの質問者が並ぶ中で、生徒さんたちは皆、静かに自分の勉強をしながら（⑥のMさんは暗唱をしながら）、或いは本を読んだり、当時はウオーク・マンやCDを聴いたりしながら待つのが普通でした。ところがS君の次の人も、その次の人も、さすがにS君の長引く質問には耐えられなかったようです。すごすごとS君は帰ってゆきました。その後、彼がサッと質問をして帰ってゆくようになったのか、いつも通りに長い質問を続けたのか、或いはもう質問には来なくなったのか、私にはどうしても思い出せません。

★それから四-五年が経ってからのことです。突然、S君が講師室に現れました。

気の弱そうな顔と、鼻先の脂汗とで、私には直ぐにS君であることが分かりました。正直のところ私は、あの「ゲップ事件」の後、(勿論自分の内だけのことですが) S君のことを「ゲップ・S君」と呼んで思い出し笑いをすることや、余りにも多い質問で疲れた日には、質問者の代表として、彼のことを恨みがましく思い出すこともあったのでした。要するに彼は印象深い、忘れ難い生徒さんの一人だったのです。

★四-五年が経っての再会。二人の間で交わされた会話は、以下のようなものでした。

「久しぶりだね。S君だろう？ その後どうしてた？」

「先生、僕の名前、憶えていてくれたんですね！」

「どうした？ 元気でいたかな？」

「先生、僕、前にしつこい質問をしたでしょう？ 済みませんでした。

あの頃、父が癌で死にそうで、僕、落ち着いていられなかったんです。

馬鹿な質問をしてしまって・・・本当に済みませんでした」

私は愕然としました。S君のゲップの奥にあったのは、お父さんを失おうとする息子のいたたまれない心、遣り切れない心、そしてこの上なく優しい心だったのです。

★予備校という場は、そしてドストエフスキイ研究会という場も、ある意味では「通過点」でしかありません。ここでの一年あるいは数年の間に、若者たちと私とがそれぞれの人生の軌跡を交差させ、「受験勉強」あるいは「ドストエフスキイ」という交点を東の間共有した後は、再びそれぞれの道を歩んでゆくのです。私の立場は、常に様々な若者たちを迎え、そして送り出す役割でしかなく、その若者たちの背後にある生活と生の詳細までを知ることはまず不可能です。しかしS君がその「ゲップ」と共に教えてくれたことは、その一瞬与えられた交点には、互いの生の一切が込められているのだということでした。この事実と認識は私の心に強く重く刻印されました。ここからゆけば、私はNさんの「城」に切り込むべきだったのでしょうか。しかし恐らくそれは、先に記したように、自分の力を無視した自己満足の認識と行為に終わったに違いないのです。

ドストエフスキイは遺作『カラマーゾフの兄弟』において、主人公アリョーシャをして、師ゾシマ長老の死後、「実行的な愛」の生に踏み出させます。自らの没落を恐れず、他人との出会いの一瞬を、「実行的な愛」を以って永遠化してゆく青年、人類へのドストエフスキイの遺言とも言うべきアリョーシャ。私はこの青年に目を釘付けにされています。皆さんも、是非、この青年と向き合ってみてください。(この項了)

予備校 graffiti ⑨

— Y君の海外修行と一年越しの暗記・暗唱 —

★私が担当していた公開単科・基礎貫徹英語ゼミで、もう二十年ほど前のこと、アメリカ留学のために二学期を途中で終了したのがY君でした。最後に私が皆の前で挨拶をするようにと促すと、Y君は自分が高校の頃に実に不甲斐ない生活を送り、「多浪」となってしまったこと、その「けじめ」をつけるためにも、親の協力もあってアメリカの大学に留学をすることになったこと、そして出発まで「キ・ソ・カ・ン」の授業と「ドストエフスキイ研究会」に入れてもらい頑張っていたこと、これらのことを短く熱く語り、皆に別れを告げて出発をしてゆきました。

「公開単科」とは河合塾本科の授業以外に、講師が自分自身でテキストを作り、自由に授業を展開することを任されたゼミで、ここには河合塾以外にも代ゼミや駿台等からも多くの生徒さんが集まり、独特の雰囲気と活力が生まれる場でした。今は終了しましたが、私の担当するゼミは「基礎貫徹英語ゼミ」を略して「キ・ソ・カ・ン」と呼ばれていました。この公開単科ゼミのこと、ここで出会った生徒さんたちのこと、そしてゼミ開始や終了の経緯などは、予備校の歴史の一断面として、また別の機会にお話することにしたいと思います。「予備校 graffiti」に紹介する人たちも、多くがこのゼミで学びました。

★翌年Y君が一時帰国をし、池袋校舎に私を訪ねてきました。寸時を惜しんで勉強をした一年間、ジャンク・フードを食べ続けての一年間。相当体重を増やし、貫録をつけての登場でした。しかし何よりも私をハッとさせたのは、キッと結んだ唇と眼力の強さでした。色々な報告をしてくれた最後に、Y君は私に暗唱チェックをして欲しいと切り出しました。彼はキ・ソ・カ・ンの授業を最後の三回ほど受けずにアメリカに発ったため、まだそれらのチェックをしてもらっていないと言うのです。

★早速、近くの西口公園でチェックが始まりました。折しも氷雨が降り始め、私を大きな木の下に立たせてくれ、自らは雨の中に恰幅の良い体で仁王立ちになったY君は、一講分それぞれ50行ほどの長文を大きな声で暗唱し始めました。近くを主婦たちが「あの人たち、何をしているの？」と不思議そうな顔をして通り過ぎてゆきます。立ち止まってしばらくの間、我々二人をじっと窺がう人もいます。そんなことに一切お構いなく、大きな声で英文を暗唱し続けるY君の「やる気」が本当であること、アメ

リカで本気でやっていたことがハッキリと伝わってきました。心地よい氷雨でした。

★その後 Y 君はニューヨークの大学での勉強を終了し、今は日本で塾の英語講師をしながら自らの研究を続けています。今度は親の面倒にならずに「一身独立」、全て自分の責任で勉強をしようと家も出ました。苦手だった英語も努力が実を結び、今は家庭教師や塾で教えることに自信と楽しみを見出しています。そのような中、彼は時々私に連絡して来て(それが実に礼儀正しい!)、溜まった質問や思索の課題をぶつけてきます。

★受験勉強からアメリカの大学での勉強へ。親への依存から自立の努力へ。それまでの社会学的思考からドストエフスキやニーチェも含めた実存的・哲学的思索へ —— Y 君の二十代の努力は「怠惰で不甲斐ない自分」に対して「けじめ」をつけることから始まり、英語への集中を媒介として、三十代、遂には「思索をする自分」を発掘するに到りました。この延長線上で、彼は勉強をまだまだ続けるつもりだとのこと。

「一身独立して、一国独立する」(福沢諭吉『学問のすすめ』、1873)。自分の未熟さを誤魔化さず見つけ、社会が設定した「枠」の外に出て、自分自身の「価値観」を探求する —— このような「勇気」を持った青年の「努力」が一つ一つ積み重なり、衰退しつつある日本的一方で、この国を真の成熟した国にしてゆく流れも生まれるのでしょうか。

★教育については、予備校にいと、「公立学校の教師に！」という安定志向の若者を多く見受けます。しかし小さな「塾」という不安定な生活の中で頑張り、子供たちばかりか自らも力をつけ、教えることの大変さと共に楽しさも味わい、真の自立の道を見出すという Y 君の道は大変ですが、一つの参考となるのではないのでしょうか。前回紹介した T さんもまた (⑤)、地方の町の小さな英語塾で、それまで蓄えてきた豊富な経験と知識とを土台に、自らの課題と使命を果たそうとしています。

福沢諭吉の慶應義塾大学の出発点も、築地の小さな塾でした。上野から幕府と薩長とが戦う大砲の音が聞こえてくる中、彼はこの「塾」で少数の若者たちと洋書講読をしつつ未来に備えたのです。河合塾も出発点は小さな塾であり、この河合塾に身を置く私も、その前には大学院での勉強と並行して、友人たちや妻たちと東京の郊外の町に小さな塾を創り、ここでの十年余で、かけがえのない経験と思い出を一杯与えられました。ここで教えた生徒さんたちは、今も交流が続いています。

「塾」という場の創造的可能性について、自らの人生の選択肢の一つとして、皆さんの心にも留め置くことをお勧めします。但しそこに必要なのは、まず自分の「夢」を持つこと、そしてその夢に向かって一人ででも踏み出す「勇気」を持つこと、更にはその夢の実現に向け、生活の安定は容易に得られなくとも「努力」を惜しまないこと —— これらのことを忘れてはならないでしょう。

(この項 了)

予備校 graffiti ⑩**— 心優しき東大生 —**

★長い間予備校で教えている間に、東大に送り出した浪人生は随分の数に上りますが、I君ほど謙虚で心優しい東大生も珍しいのではないかと思います。「天下の東大」に入ったということで、「世に勝った！」などという、とんでもない思い違いをする若者も少なくなく、下着にまで「東大××」と名前を記す幼稚な学生もいたり、「イヤー」という謙遜の言葉の裏に、無限の自負心をチラつかせる「エリート」候補生もいたりする中で、今回紹介するI君は、傲慢・虚飾とはほど遠いところにいる学生でした。

★私は授業の合間に、ドストエフスキイがシベリアで「十浪」をしたという話をしたり、佐野洋子さんの『百万回生きた猫』や、S.シルバースタインさんの『大きな木』(“The Giving Tree”)や、山口勇子さんの『おこりじぞう』、そしてアンデルセンの『すずの兵隊』などの絵本を読んだりするのですが、ある時ふと気がつく、最前列の端の席で目を真っ赤にして涙を拭いている生徒がいるのです。それがI君でした。

★I君は予備校で無二の友人を得ました。ところがこの友人、医学部志望のW君が或る大変な難病にかかってしまい、生死を賭けた大手術を受け、長い入院生活を余儀なくされるという悲劇が起こってしまいました。I君は時間の許す限り病院に見舞いに行き、苦しみと絶望の底にいるW君を励まし続けました。残念ながら、この年W君は受験自体が出来ず、I君も試験に失敗してしまいます。心配されたご両親から、当然のことですが、勉強に一層集中するよう厳しく迫られると、I君はただ涙するしかなかったようです。しかしその涙の後で、なお彼はW君を見舞い続け、以前に増して勉強に打ち込み、翌年は東大・理科I類への合格を果たしたのでした。

★大学へ通う一方、I君は河合文化教育研究所の私のドストエフスキイ研究会にも参加を続けました。毎年この研究会が始まる時、私はまず参加者に自由に自己紹介をしてもらい、その自己紹介の仕方によって各人がどう個性を表現するのか、楽しみに聴いています。ところがこの時、「僕、今一応、〇〇大学の××学部にあります」とか、ただ「僕、△△大学です」とか、「私、◇◇です」とか、一見シャイさの内に実は誇らしげに、また嬉しそうに自分が入学した「有名大学」の名を口にして、それ以外には自己紹介をしない人たちが少なくありません。その心理を理解出来なくもないのですが、やはり幼稚と言うしかなく、こういう人たちは、残念ながら大抵ドストエフスキイと長く取り組む縁はないようです。I君は自分の大学名を口にすることはありませんでした。

「僕、星が好きで、天文学をやりたいと思っています。よろしくお願いします」

これが彼の自己紹介の全てでした。大宇宙を前に、またドストエフスキイを前に、「東大」という名前は不要であり、彼はこの時およそ語るべき全てを語ったのです。「それは彼が東大生だから、余裕で出来ることだ」—— こう言う人たちもいますが、それは I 君の謙虚で真摯な人柄そのものを見ようとしない、僻みの精神でしょう。ここにもまた、人間の心の厄介な問題が潜んでいるように思います。

★ I 君は今或る専門機関に属し、研究に打ち込んでいます。世界各地の天文台へもしばしば赴き、巨大望遠鏡の設置をし、夜空と睨み合っています。彼自身の課題は、ビッグ・バンから放射された電波を電波望遠鏡で捉え、宇宙の始まりを解明することだと言います。ドストエフスキイを愛読する天文学者が、やがてどのような「宇宙創造説」を提唱するのか、私は楽しみにしています。心優しき彼が宇宙を見つめる望遠鏡には、無数の星々と共に、きっと天界の天使たちの姿も映し出されているに違いない、そして電波望遠鏡には天使たちの囁きが響いているに違いない、私はこんな勝手な想像もしています。

I 君が属する専門機関、天文台のホーム・ページで、彼は私の紹介した童話との出会いのことを書いています。興味を持たれた方は、探し当てて読んでみて下さい。

★ I 君の友人 W 君の、その後のことも記しておきます。上に記したように、彼は医学部志望の、やはり優しく鋭い頭脳を持つ若者でした。しかし大変な肉体的ハンディを背負ってしまったことから薬学に転じ、体を大切にしつつ、今は薬剤師として働いています。彼の夢は、人間を苦しめる様々な難病への特効薬を一つでも発見することです。この W 君をやはり天使たちは見つめ、きっと彼を素晴らしい発見に導いてくれることでしょう。

★最後に私の方から I 君に、そしてこれを読む皆さんに、誘いの声を一つかけさせて頂きたいと思います。正確な記憶ではなく恐縮ですが、アインシュタインが自分の理解する宇宙を、自分と同じように捉えて表現している人物が三人いる。それは哲学者のスピノザと、作曲家のモーツァルトと、文学者のドストエフスキイである —— このように語ったそうですが、若い頃からこの言葉は私の関心を強く引き続けています。授業の場でも繰り返し紹介をし、この宇宙感覚について色々と話をしよう、特に理系の人にはアインシュタインの宇宙観を教えて欲しいと訴えてきたのですが、どれも対象が大き過ぎて、約束はしても実際に話に来てくれた人は一人もいません。素人の「空談」でいいではないですか。I 君と皆さんに、この場で改めて声をかけさせて下さい。 (この項 了)

予備校 graffiti ・ ⑥～⑩ ・ 余録

★「予備校 graffiti」第二回目を記して改めて感じることは、先にも記したことです。教える立場の私の方がむしろ教えられ、課題を突きつけられることが如何に多いかということです。⑥と⑦と⑨の三人の海外体験は、我々が小さく固まることなく、世界に向かって心を開いて踏み出し、そこに存在する課題と勇気を持って取り組むことが如何に必要で大切かを教えてくれ、⑧の二人の生徒さんの「病」は、人間の心が宿す窺い知れない謎の奥深さを垣間見せてくれると同時に、そこに潜む困難さと深刻さも思い知らせてくれました。また同じ⑧のS君の場合は、「ゲップ」一つの背後に如何に重大な現実が潜み得るかを悟らせてくれ、⑩のI君が流した涙は、彼の優しさばかりでなく、彼が向かう宇宙の無限の奥行きにまで、私の心を向けさせてくれたのでした。

更に言えば、彼らによって私は、改めてドストエフスキイ世界の広大さと奥深さに気づかされ、同時に逆に、自分がドストエフスキイに胸を借りていたことで、彼らとの出会いが持つ意味の重大さにも気づかされたのだと思います。結局私は生徒さんたちとの関係でも、ドストエフスキイとの関係においても、自分が教えられる身であることを痛感させられるのです。

★本欄が「予備校で出会った青春」について報告をするという性格上、今回も大学進学に当たっての動機や姿勢が多く問題となりました。多数の生徒さんを大学に送り出してきましたが、私は現在の日本の大学について、以下の三つの点で強く問題を感じさせられるに至っています。

1. 大学への進学にあたり、多くの高校の先生やご両親や本人さえもが、真に学びたいことは何かを十分に考えず、また判断の基準ともせず、ただ偏差値や学歴を基準としていること。
2. 大部分の大学生が、読書をし、思索をするという意味での、「勉強」をしなくなってしまったこと。
3. 日本社会の衰退・劣化と相呼応するように、生徒たちばかりか大学の教師たちのレベルも(またそれを問題とすべきマスコミ・ジャーナリズムのレベルも)、非常に低下してしまったこと。

これら三つの問題については、既に随分以前から問題とされていたことですが、現在も予備校の現場に入ってくるのは、驚くほど多くの悲惨な情報と事実です。日本の国力の衰退を、また日本が陥った「病」の重篤さを、「アカデミズム」と言われる教育の現場自体が皮肉にも証明し裏付け、更にはその流れを加速さえさせているように思われます。能天気な人々の現状維持を図る怠惰な精神、自分は「教育者」である前に「研究者」であるとする人々の無責任、これらが日本の教育を滅ぼしてしまうのか、或いはこの現実に危機感を抱く人々の努力が功を奏すのか、予断を許さない所に来ていると思います。

今回紹介したMさんの、またK君の意見に(早稲田大学には少々耳が痛かったと思いますが)、是非耳を傾けて欲しいと思います。こう記す私自身も、「研究会便り」の(1)と(2)で記した河合文化教育研究所やドストエフスキイ研究会設立の趣旨を改めて確認し、そこに立たねばと思います。

★⑩のI君とW君との友情に関連しても、一言記しておきたいと思います。

高野悦子さんが「二十歳の原点」とは「孤独と未熟」であるとするように(『二十歳の原点』、新潮文庫)、浪人時代とは、そのプレッシャーの強さゆえに、⑧のCさんやNさんのような真面目で繊細な人

たちが、「心の病」に追いやられるという悲劇が生まれることも事実なのですが、人が虚飾を捨てたところで、「孤独と未熟」の内に素晴らしい友人と出会うことも事実です。また予備校を出た後も、お互いに「孤独と未熟」の空間と時間を共有出来た人間同士として、更にそこでひたすら頑張ったという事実を土台として、何時までも「友人」としていられるのです。

しかし予備校にいる間でさえも、自分の出身校が「名門」であることを人に伝えたい生徒さんも少なくなく、まして大学入学後に、そして就職後に、再びその虚飾に塗^{まみ}れてしまう人が多いことは、日本の学歴社会の恥すべき点であり、また日本人の心の弱さを何よりも表わす点で、残念です。

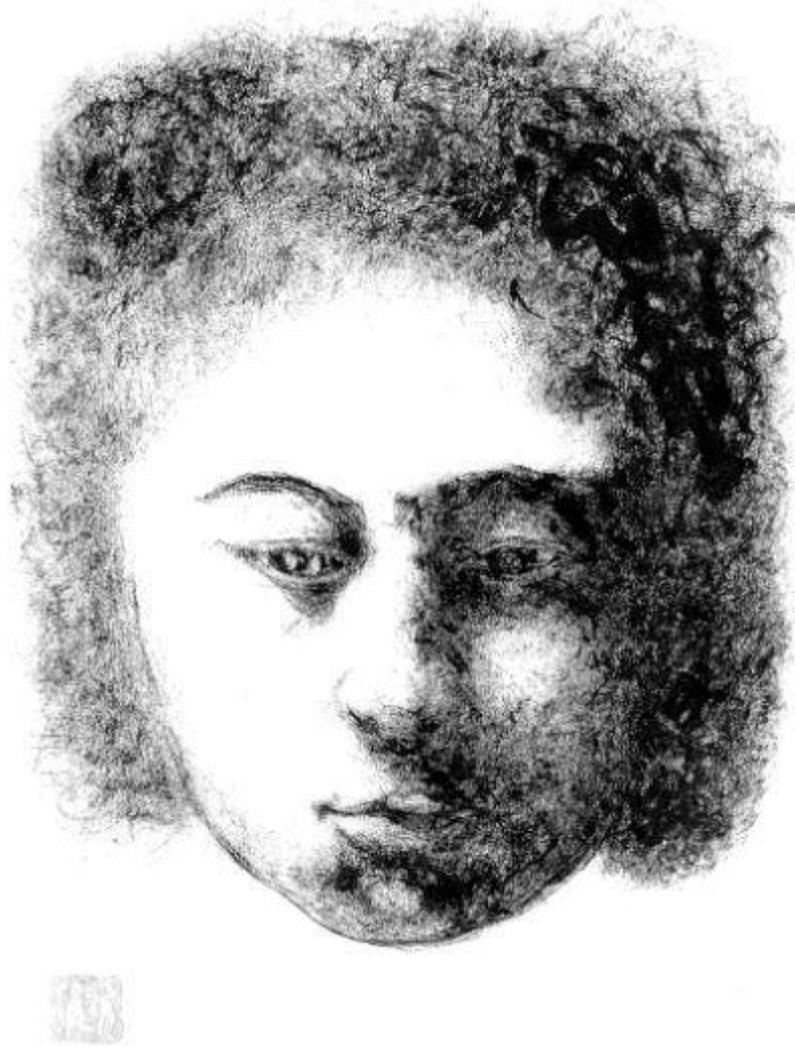
★私が「ドストエフスキイ研究会」に大学生の皆さんを迎えたのも、大きくはこの問題との関連でした。つまり世俗的価値観一切を無としてしまい、その無化・没落の底から真の価値に目覚めさせるというドストエフスキイの激しくラディカルな精神に、若者たちが少しでも触れ、そこで自らを鍛えて欲しいという思いからでした。この「予備校 graffiti」も、そのドストエフスキイ研究会に学んだ人たちが、その後如何なる人生を歩みつつあるかの途中経過の報告書であり、また彼らに遠くから伴走する私（とドストエフスキイその人）から贈る、励ましの声援という意味もあることは、「はじめに」に記した通りです。私は是非これを読む皆さんに、有名校の同窓会や大会社の忘年会に出席する人よりも、浪人時代の同窓会を創り出し、そこで新たにドストエフスキイについて論じるような人間になって欲しいと思います。

学歴による差別心、また民族的偏見や差別心等については、まだこれからも取り上げることになると思いますが、学歴による差別心と戦ったD君の痛快な、そして苦いエピソードについては、⑤で紹介しましょう。

(この項 了)

予備校 graffiti ・もう一つの「青春」②

小出次雄画



[前回も記しましたが、毎回「予備校 graffiti」の最後には、私の恩師小出次雄先生（1901-1990）のデッサンを一枚ずつ付します。小出先生は、自らの描かれた絵画や書に対して、一切説明を加えることはされませんでした。それゆえ我々学生は、先生の作品と向き合い、直接自分自身の目と心とで受け止めることを迫られました。皆さんもここに紹介する一枚一枚と直接対峙し、心で受け止めて下さい。それが「予備校 graffiti」の内容と何らかの形で響き合うこともあり、それとは全く無関係に、別の角度から皆さんの心に入り込むこともあるでしょう。何も感じないこともあるでしょう。小出先生は、それでいいのだと言われると思います。]